

道路改良工事により生じる残地の利用実態に関する研究

熊本大学工学部 学生会員 ○今井 洋人
熊本大学工学部 正会員 小林 一郎

熊本大学工学部 正会員 星野 裕司
熊本大学大学院 学生会員 毛利 洋子

1. はじめに

(1) 背景・目的

近年、わが国では高層ビルが立ち並ぶ中、公開空地やポケットパークなどオープンスペースを利用とした快適でうるおいのある空間を目指し整備が行われている。

一方、道路改良工事は、道路の拡幅または線形の改良が行われる。昔の規格（道路を通すことが目的）から現在の規格（交通の円滑化、歩行者の交通安全確保が目的）へ移行した場合、部分的に線形のズレが生じる。そこで、このズレにより生じ、道路本来の機能を失った空間を残地として捉え本研究では着目した。このような形成過程により、残地は他のオープンスペースとは異なり、形状がいびつであり立地・面積等をコントロールしがたい現状にある。その結果として、現在未整備の状態（写真-1）や、周辺から切り離された整備（写真-2）が見受けられた。つまり、有効に活用されていない可能性が高い。

そこで本研究では、残地を地域固有のゆとり・賑わいの創出の場として活用する際の可能性を探ることに着目し、現地調査から残地の現状または利用実態を把握する。そして、その調査結果の分類・分析を行う。



写真-1 未整備の状況



写真-2 独立した整備の例

(2) 残地の定義

本研究で扱う残地を定義する。大きく分けて3パターンあり、一つ目は冒頭でも述べたように新たに敷かれる道路により、道路本来の機能を失った旧道が残るパターンである（図-1）。次に、新たに敷かれる道路沿いの民地を買収し、公共性を持つようになったパターンである（図-2）。そして、最後にレベル差処理（盛り土や切り土）を行うことにより、旧道が残るパターン

である（図-3）。なお、これらは道路改良工事により生じたことを前提条件とする。

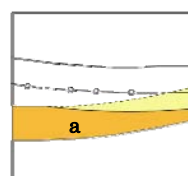


図-1
旧道数が残る
パターン（平面）

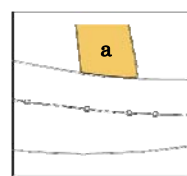


図-2
民地を買収する
パターン（平面）

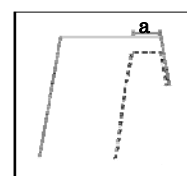


図-3
レベル差処理の
パターン（立面）
(a: 残地)

2. 調査概要

(1) 調査対象

本研究では、近年の現状を把握するため、特に熊本県内で過去3年間に行われた道路改良工事に調査の対象を絞った。そして、熊本県・国土交通省熊本河川国道事務所が実施している『ちやくちやくプロジェクト¹⁾』を参照し、本研究では特に県が行っている10件の事業を調査対象とした。

(2) 調査方法

残地は歩道と一体的な整備をされる場合があるため、一度整備が完了してしまうと場所を把握し難くなる。そこで、まず各整備担当者にヒアリングを行い、計画前後の分かる平面図を用いて残地を抽出し、寸法・面積の把握を行う。その後、調査項目に従い現地調査を行う。

(3) 調査項目

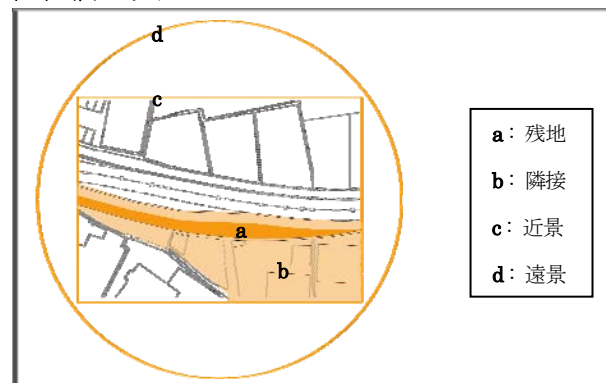


図-4 各エリアの表示

現地調査を行うにあたり、まず残地内部を把握する。それに加え、周辺から受ける影響が大きいため、どのような周辺環境にあるのかを把握する必要がある。そ

して、それらの要素を個別に見ていくのではなく、図-4のように面的に調査項目を整理した。

このように、考えることによってa～d各エリアの相互の関係性が明らかになる。そして、それらをさらに細かい要素へと分解した調査項目が表-1である。

項目		
形状	規模（面積）	
	レベル差	
機能	a：残地に付加された機能	植樹帯
		ファニチャー（ベンチ・水飲み場…）
		動線
		人の動き
		その他
	b：隣接する機能	バス停
		横断歩道
		道路（車線数・接道数）
		人の動き
		その他（乗り入れ…）
立地	c：近景	文化的要素（城・橋梁・神社・仏閣…）
		自然的要素（山・川…）
		施設（公園・学校…）
		周辺の土地利用（田園・住宅…）
	d：遠景	

表-1 調査項目

各項目にある人の動きに関しては記述で記録する。また遠景においては、残地周辺の風景 360° の写真を撮ることとした。そして、レベル差は断面図の作成、その他の項目に関しては、平面図に位置を動線は矢印で図示する。

3. 調査結果と分析

今回現地調査を行った結果、14個の残地が確認された。一事例として、H17年度に供用された小池竜田線の調査結果を示す（図-5、図-6、写真-3）。熊本市内に位置し、車道に対し平行に2%の緩やかな勾配をもつ道路である。改良後旧道が残り（S=0.05ha）、植栽帯として整備された。円弧状に内側に入り込んだところに樹木を配置、乗り入れを考慮した分割、また車道側に管理用通路が設けてあることから、特徴的な動線作り、歩道と一体的な整備が見られた。しかし、人の動きを見てみると、歩行者は通常それらを通らず歩道側を歩く姿が多く見られた。外部の視点から見ると、利用す

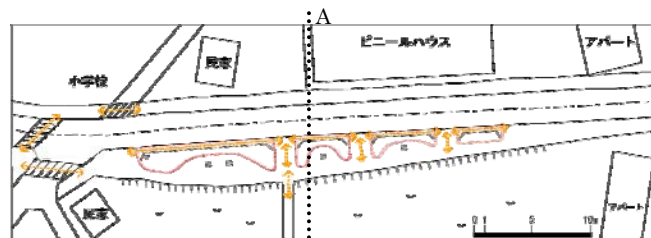


図-5 平面図 (←---→動線)

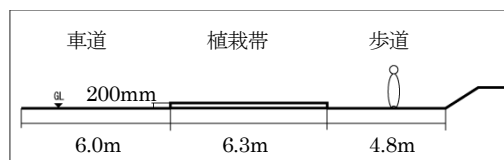


図-6 A-A' 断面図



写真-3 360° 周辺写真

る空間というよりも景観としての機能が強い。横断歩道を渡ったところに小学校があり、周辺には農業と住宅街に囲まれたこの地域固有の空間作りの可能性がこの他にも考えられる。

また、調査結果全体から民地パターン（6個）は、ポケットパーク等（3個）の多機能空間が多く、旧道パターン（8個）においては、植栽帯（4個）・未整備（3個）が多い結果となった。これは、旧道パターンの空間整備が、民地パターンに比べ難しいという現状を表している。これらのことから、今後は旧道パターンに焦点を当て更なる分析を行っていき、残地整備における可能性を提示したい。

4. おわりに

本稿では、残地を調査する上での調査項目の整理と手法を述べた。加えて、現在行われている残地の整備実態を把握し分析を行った。

【参考文献、注釈】 1) 熊本河川国道事務所HP・熊本県HP
<http://www.qsr.mlit.go.jp/kumamoto/road/chaku/index.htm>
<http://www.pref.kumamoto.jp/traffic/chaku/index.html>